■研究十二月往来〈112〉

江戸時代能楽史史料管見

竹本幹夫

江戸時代の能楽の研究の基本史料といえば、まず数々の演能記録があり、また江戸後期に幕府により編纂された『徳川実紀（以下『実紀』と略称）が重要である。ところが国立公文書館内閣文庫には、能については『実紀』以上に詳細で、演能記録の不備をも補い得る、幕府関係の日記類が複数所蔵されている。いずれも学界未知のものではないが、能楽史研究には本格的に利用されたことのない、新史料といってよいものであろう。

これら史料中で最大のものは『柳営日次記』七三四冊で、明暦二年（一六五六）から安政三年（一八五六）に及ぶ、二百年分の日記である（雄松堂よりマイクロフィルム公刊）。『実紀』の編纂資料に使用されたらしく、他資料に基づく別筆の書き入れ（後述）もあって原本かどうかは疑問ながら、内容は幕府の公的日記と考えてよい。これと同類の日記に『江戸幕府日記』四九七冊、『柳営録』四一六冊、『柳営日録』二一一冊がある。右の四日記にはいずれも相互に欠巻による若干の年代的ズレがある。すなわち最古のものは『柳営日録』中の寛永八年（一六三一）に始まる「寛永録」であり、最新は『江戸幕府日記』の慶応三年（一八六七）までの記録である。これらの現存巻の年代だけを見ても、ある程度まで相互補完が可能なのは明らかで、これらにより慶長・元和年間を除く江戸時代のほぼ全体を見渡すことが出来るのである。

これらの日記の執筆態度は一様ではなく、甚だ丁寧な場合もあれば、ひどく能に冷淡な場合もある。おおむねは表日記ともいうべき公的性格であるから、本丸の大広間で演じられるような能については全曲目と配役とを記すが、将軍の私的催しでは上演の事実に言及するだけの場合も少なくない。配役を記すにも、シテしか書かなかったり狂言の演目を省略することすらある。ところがそれでも『実紀』や演能記録を補ってあまりある。

これらの日記類で特に重要なのは、番組を含む演能規式の記述が甚だ詳細であることのほか、『実紀』ではほとんど記録されないような、役者の御目見・家督、賜暇・帰参、賞罰などの事実が克明に記されていることである。それが当時の能界の実状を完全に網羅しているとは断言できぬにせよ、例えば『柳営日次記』で明暦二年から寛文元年までのわずか六年間に、四十例近くの役者の相続・新扶持の記録があるということだけを見ても、その能楽史資料としての価値の高さが理解されよう。そこには禄高とともに役者の姓と通名、父兄の名前が明記され、諱名、役名を併記することすらある。これは通名だけで姓や役が分からず難渋していた、能役者の家系考証に大いに役立つことは必定である。

いま試みに『江戸幕府日記』中の「承応三年御日記」の能関係記事を『実紀』と比較してみよう。正月二十七日の公家衆饗応能は、『実紀』にも番組が見えるが、記事の全体は「承応三年御日記」の方が詳細で、これは同月三日の謡初や四月二十五日の大広間の能も同様である。五月四日の観世・宝生・喜多三大夫座中への賜暇のこと、八月十五日の二丸御成御慰御能の番組、十一月三日の金春座への賜暇と金剛大夫の跡式仰せ付け、十二月二十七日の跡目被仰付候面々に「名跡　右京弟金剛次郎九郎」「跡目被下　長命清右衛門」とあること、などは『実紀』にはまったく見えない。なお本書のみならずこれら日記類には、徳川御三家の日記や奥日記等の諸史料を引用した別筆の書き入れがあり、史料間の番組の異同を注記することもある。いずれにも出典が示されており、貴重といえよう。

また三代将軍家光は能と共に踊りや幸若をも好んだことで有名であったのに対し、明暦～寛文年間の『柳営日次記』によれば、幼少の四代将軍家綱は奥で鷺・大蔵一門に狂言尽しを日に二三十番も演じさせたり、〈羅生門〉〈土蜘蛛〉のようなわかり易い風流能を好んだりもするが、元服後は夜間の幸若舞見物や平曲聴聞の方に熱心で、その嗜好は前田利常らの諸侯にも影響を与えたようである。幕府の日記を諸藩の史料と併用すれば、こうしたことも手に取るように分かるのである。

五代将軍綱吉・六代将軍家宣時代は江戸時代能楽史の頂点の一つであるが、家宣時代には、右の四日記に加えて御側日記的な『間部日記』があるので、『江戸幕府日記』の中の「宝永五・六・七年奥御日記」とともに言及しておく。『間部日記』は家宣の側近で能役者出身の間部越前守詮房の日記で、宝永六年（一七〇九）四月から正徳五年（一七一五）九月まで、家宣が将軍となった前月から、家宣後嗣の家継没年の前年にいたる。内閣文庫には欠巻はあるが大半は相互補完可能な、二種の写本が所蔵される。本書には奥向きのことも表向きのことも共に記され、演能規式も開始・終了の刻限まで克明に記録する。これと好一対をなすのが先の「宝永五・六・七年奥御日記」で、綱吉の後継に定まった西丸時代からの家宣の奥日記である。西丸時代の宝永五年分は奥向きのことのみであるが、将軍就任前後の翌年分からは表日記をも兼ねるようである。こちらも家宣の起床から還御までを記して詳細・精密な内容で、やはり能関係の記事も豊富に記録されている。ちなみに幕府関係の奥日記の残存例は、前記幕府日記類に引用されるものを除き、きわめてまれのようであり、管見では他の資料を知らない。この両記録に『柳営日次記』や宮城県図書館伊達文庫蔵の『御城御内証御能御囃子組』をも参照すれば、綱吉をもしのぐとされる家宣の能狂ぶりの全貌がほぼ明らかになる。

公的日記ではないが、寛永以前の能楽史を補い得る史料もある。天正から寛永年間にかけての記事を諸書より摘録した、『天寛日記』などの編纂史書がそれである。能への言及の度合いは『実紀』と同程度ながら、能組の全配役を記すことがあり、慶長・元和・寛永までをカバーする点で重要である。『慶長日記』（未見）等、類書も少なくない。

以上、従来は資料が乏しく研究もなかった、近世前期下半期の記事に絞って幕府日記類を紹介した。これら日記類の活用により、江戸時代能楽史研究全体が格段に緻密になることは疑いあるまい。

（早稲田大学助教授）